

火を点ず

小川未明

青空文庫

むら 村へ石油せきゆを売うりにくる男おとこがありました。髪かみの黒くろい蓬ぼう々ぼうとした、脊せいのあまり高たかくない、色いろの白しろい男おとこで、石油せきゆのかんを、てんびん棒ぼうの両りょう端はしに一つずつ付つけて、それをかっいでやってくるのでした。

男おとこは、勤きん勉べん者ものでありました。毎まい日にち、欠かかさずに、時じ間かんも同おなじように、昼ひるすこし過すぎると村むらに入はいつてきて、一けん軒けん、一けん軒けん、「今き日は、石油せきゆはいりませんか？」と、いって歩あるくのでした。

その男おとこは、ただ忠ちゆうじつ実じつに仕し事ごとのことばかり考かんえているようでした。それには、なにか、目も的くてきがあつたのかもしれない。たとえば、金かねがいくらたまつたら、店みせをりつぱにしようかとか、また、

はやく幾何かになれば幸福だと胸の中に描いていたのかもしれない。それとも、もつとさしせまったその日のことを考えていたのか？

あまり口をきかない、この男の顔を見たばかりでは、心の中を
知ることができなかつたけれど、人間というものは、なにか目
的がなければ、そういうふうに勤勉になれるものではなかつ
たのです。

もつとも、男には、若い嫁がありました。年をとつた母親も
あつたようです。小さな店だけで、石油を売るので、暮らしが
たたなかつたのかもしれない。

しかし、この村には、もつともつと貧乏の人たちが住んでい

ました。屋根の低い、暗い小さな家が幾軒もあつて、家の中には竹ぐしを造つたり、つまようじを削つたり、中には状袋をはつたりしている男も、女もあつた。それでなければ、一日外に出で働いてゐるような人たちでありました。

彼らは、ものを問いかけられても、手を休めて、それに返答するだけのときすらおしんでいましたから、頭だけを外の方に向けて、

「まだ、今日はあつたようだ。」とかなんとく、その石油売りにいったのでした。

「また、お願いいたします。」と、男は、軒下を去つて隣の家の方へ歩いていくのでした。

その後で、家の中では仕事をしながら、家族のものが、こんなうわさをしています。

「売りにくるのと、いつて買うのはたいへんな違いだ。売りにくるのは、きつちり一合しか量らないが、いつて買うとずっとたぐさんくれる。これから夜が長くなるから、夜業をするのにすこしでも多いほうがありがたい、晩方ちよつといつて買えばいいのだ。」と、母親がいうと、

「ほんとうに、きつちり一合しか量らない、なんだか足りないよ。うなときもある。きたのを買うとランプの七分めぐらいしかないが、いつて買うとちよつと口もとまでありますよ。」と、娘が返答した。

これらの人々は、こうして、なにか問題が起こるとたがいに口をききあうが、そうでもなければ一軒の家でも、めつたに話すらせずに下を向いて指先をみつめながら仕事をしているのでした。頭の中では、多分娘はさまざまな空想にふけりながら、また母親は別のことを頭に描いて……。

ちょうどそのとき、隣家の軒下では、男は肩からてんびん棒を下ろして、四十前後の女房が汚れた小さな石油を入れるブリキの罐を手にかけて出てきました。

窓の格子には、赤いとうがらしが十ばかり一ふさにして結びつけてあります。そこには、よく日が当たるのでした。女の皮膚の色は青ざめてたるんでいた、そして、水腫性の症状がある

らしくふとつて、ことに下腹が飛び出ていました。

おとこ

男は、こちらの石油かんのふたを取りました。青々とした、

きょうれつ

強烈な香気を発散する液体が半分ほどもかんの中にな

みなみとしていました。

五勺のますと石油をくむ杓があつて、男

はその杓を青く揺れる液体の中に差し込むせつな、七つ八つの

しょうねん

少年が、熱心にかんの中をのぞいて、その強烈な香気

をかいでいるのでした。

「どいておくれ。」と、男は、ぶあいそうにいった。少年は、

一歩退いて、目を細くして、雲切れのした秋の空を仰いでいまし

た。

「また、油の値が上がったんですね。」と、女房はいいまし

た。

「また、上がりました。」と、男は答えながら、五勺のますにほとんど過不足なく平らかに石油を満たして漏斗にわけました。そして、もう一杯入れるために、また、杓子を石油に差し入れました。

「こんなに石油が高くなつては、夜もうっかり長く起きていられない。」と、女房はいいました。

その言葉の調子には、こう値が上がつたら、どんなに石油を売るものはもうかるだろうというように聞かれたのです。

「卸問屋のほうで値を上げるのですから、こうして売る私どもは、やはりもうからないのです。」

無口な男は、いいわけをするように、ただこれだけいいました。

女房は、こういつたら、半杓ぐらい最後に、おまけを

入れてくれるだろうか、目をさらにして、じつと見ていたので

すが、男は、やはり巧妙とでもいうように、過不足なく平ら

かにますに入れて漏斗に移すと、それぎりでした。

女は、むしろ男が早く漏斗を入れ物の口から抜いたので、青

味を帯んだ、美しいしずくがまだ残っていて、かえつてますに移

されたのだけ損をしたような気すら起こったのです。

「ありがとうございます。」といて、男は、その家の前から立

ち去りました。

「売りにくるのを買うものでない。これからやはり、店へ行って

買ったほうが得だ。」と、女房は、独り言をしながら家へ入りました。

窓の格子には、火の燃えついたように、このとき、とうがらしを日が照らしていました。

先刻の男の子が、石油売りの後を追っていきました。

「僕は石油のおいが大すぎだよ。」

その子供は、友だちに出あうとそういつていました。

「かきを一つあげようか。」

友だちは、懐からかきを出して、少年に渡しました。二人の子供は、乾いた往來の上で、黄色な果実を持って楽しそうに遊んでいました。

その間に、石油売りは、圃の間を通つて、あちらへいつてしまつた。

日暮れ方すこし前に、このかさをかぶつた、わらじをはいてきやはんを着けた労働者は、村をまわりつくして町に出ようとして、ある神社のそばにさしかかり、そこに荷を下ろして、しばらく休んでいました。境内の木々は黄色く色づいていました。

「寒くなつた。今年は夜着を造らねばなるまい。」
 無口の若い男は、あたりのさびしくなつた景色を見まわしながらひとり語をしていました。

やがて、彼は、家に帰つて、日暮れ方に近づいて店頭へくる客に、石油を量つて渡していたのです。

「歩いていって売るときはおまけができないが、店みせにくる人ひとには、すこしずつおまけをしよう。」

これが彼の心かれこころの掟おきてとなっていました。すこしでも量りょうの多いのをよろこぶ喜よろこんだ、このあたりの貧まずしい生活せいかつをしている人々ひとびとは、わざわざ彼の店かれみせへやってきました。その中なかには、老ろう人もあれば、若い女おんななどもあつたが、日ひが暮くれても、まだ仕事しごとの手てを放はなさない、ほんとうに一刻いこくをも争あらしうその日ひかせぎの人々ひとびとは、子供こどもを使いつかにやるのでした。

この夜よる、幾いく百万まんの燭しょつこう光ひを消費しょうひする都会とかいの明あかるい夜よるの光こうけ景いなどは、この土地とちに住すむ人々ひとびとのほとんどその話はなしを聞きいても理解りかいすることのできないことであつたのです。

おとこ
男は、店頭みせさきにきた、汚きたならしいふうをした子供こどもを見て、どこか
で見たことのある子供こどもだと思おもいました。しかし、彼かれは、昼間石油ひるませきゆ
のかんをのぞいた子供こどもだということは思おもいに浮うかばなかつたので
す。

子供こどもは、一合ごうの石油せきゆを買かつて、銭ぜにをそばに重かさねてあつた空あき箱ばこ
の上うえにのせて、小ちいさな姿すがたは店みせさき頭かみから消きえました。

男おとこは、うす暗くらくなった光こうせん線せんのうえで、箱はこの上うえにのせてあつた
銭ぜにを手てに取り上あげて、しらべて見みました。

「なに、これは五厘りせん銭せんじゃねえか、五厘りんごまかそうと思おもいやがつ
て……。」と、いまいましそうにいつて、顔かおの色いろを変かえた。

「おまけをしたうえに、ごまかされて、一合ごうの頭あたまでいくらもうか

るけえ。」

無口な、おとなしそうな男に似合わず、急に怖ろしいけんまくとなりました。男は、すぐさま駈け出していききました。

「きつと、貧乏村の子供にちげえない。」

彼は、村の方に向かって、恐ろしい勢いで走りました。小さな子供の、油びんをぶらさげて、短い着物のすそから出た二本の足に、ぞうりをはいていく後ろ姿を見つけると、

「おい、餓鬼め、待て！」と、彼は、どなるとほとんど同時に、子供の後ろえりを引つ捕まえました。

もし、だれか村のものがこの有り様を見たら、あの平常口もきかない男に、こんな残忍なことができるかと、かつて想像の

できなかつただけびつくりするでしょう。

「五厘りんごまかそうなんて、ふらちなやつだ。」

「五厘りん出せ、それでなけりや、そのびんをよこせ。」

少年しょうねんは、黒いくろ大きな目おほめをみはって、顔かおを真まつ赤かにして、なにもいえないで震ふるえています。

「さあ、石油せきゆのびんを渡わたせ。」と、男おとこは、少年しょうねんの手てから引ひつたくるとたんになわが切きれて、びんは地ちじょう上じょうに落おちて、倒たおれると石油せきゆは惜おしげもなく、口くちから雲母きららのごとく流ながれ出でました。

「てめえみたいなやつは、大きくなるとどろぼうになるんだ。」
男おとこは、小ちいさな手てで両眼りょうめをこすつて泣なき出だした少年しょうねんを後目しりめにかけて、ののしると町まちの方ほうへ引ひき返かえしてしまいました。

神社じんじやの境内けいだいにあつた、いちようの葉はは、黄色きいろく、ひらひらと、すでにうす暗ぐらくなつた地ちの上うえに吸すい込まれるように散ちつていました。少年しょうねんは、いつまでも泣ないていたが、急きゆうになきやんだ。そして、足あしもとに倒たおれているびんを拾ひろつて、一目散もくさんに村むらの方ほうへ走りだした。

「俺おれをどろぼうといつたぞ。」と、口走くちばしりながら。

町まちに、燈火あかりのつくころでした。みすばらしいようすをした老婆ろうばが、石油屋せきゆやの入り口いぐちに立たつて、

「さつき、子供こどもが、五厘りんた足りなかつたので、どろぼうだといつてしかられたと泣ないてきたが、私わたしが銭ぜにを渡わたしたときに目めが悪わるいものでまちがつたのだ。まちがいということは、だれにでもあること

でな……。」と、老婆は、目をしばたたきながら、主人にいつた。

「いえ、五厘足りないと追いかけていっていうと、たしかに置いてきたといいなさるから、うそをいうことは、どろぼうのはじまりだといったのです。」と、平常無口の男は白々しく答えた。

翌日の暮れ方のことです。男が、客のために石油を量つていると、不意に目先に火をすつたものがある。はつと心臓を刺されたようにびっくりしたときは、非常な爆音とともに、もう火は彼を包んでいました。

少年の不思議な犯罪として、この話は、いまだにこの町

に^の残^こつて
います。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「種蒔く人」

1921（大正10）年11月

※表題は底本では、「火《《ひ》》を点《《てん》》ず」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火を点ず

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>